

NOUAK
LICENSED PRODUCT

© The Tiffen Company, 2000

KODAK COLOR CONTROL PATCHES

Blue

Cyan

Green

Yellow

Red

Magenta

White

3/Color

Black

多田江野鶏
砂村口女飼

特別
子12
3643
14







高砂

今と始の様衣（下）く目も行も坊
 了久（平）し身是九洲肥後
 芸園阿蘇の宮乃神主友成と及
 我事也。神（い）ま都を（い）人（い）様
 此度思ひ立（い）も（い）より（い）作（い）又（い）心
 次（い）ま（い）の（い）播（い）助（い）の（い）浦（い）を（い）も（い）一（い）見

高砂



下^下音信の松よとと浦内の落葉を
 袖^上了つて木陰の塵をかきよく
 所^上高砂の尾よの松を年
 ありて若乃遊もよりらむや木乃
 下^下陰の落葉のなるは命あつて
 松^下の松を久しき
 名^下前^下の松を久しき
 果^下人^下をお物殿よ若人

女^下婦^下まきりより身成若人よ壽
 ぬ^下ま^下事^下乃^下作^下 ^下こ^下あ^下の^下子^下あ^下く
 作^下り^下行^下り^下ま^下て^下ゆ^下そ ^下高^下砂^下乃^下松^下と^下ら
 付^下書^下の^下本^下を^下戸^下の^下マ ^下唯^下今^下木^下陰^下を
 清^下め^下の^下社^下を^下砂^下乃^下松^下と^下え ^下高^下砂^下
 住^下乃^下江^下の^下松^下よ^下相^下生^下乃^下名^下あり^下苗^下本^下と
 位^下者^下と^下の^下國^下を^下つ^下り^下た^下る^下よ^下行^下と^下て^下お

高砂

三

生乃松と云ふ人^{ニテ} 信乃と云く

古今の世序よ。高砂位の内乃松を

相生乃様よ受くしとあり去あつて此

射津の國住吉乃者。是成うやそ

當前乃人あれ。ちるりあつた中さ

給へ^{甲カ} かしきやま松若人の女婦

一可よ有あつて。きよ住の内き砂乃

浦山國を隔ててもいづかめやある

幸山流ん^上 引そ乃作ゆや山川

萬里を隔つきたたひ子浦よ心乃

すひ乃妹背乃道多遠^{ニテ} 先

案しきもは覺きよ。き砂位の内

松の雅精のきものたふも相生れぬ

方そのまきそや生ある人として

馬

四

年久節も佳吉より通ひ馴る
耐と娘の才許上平院此年まきくお生
乃夫婦とある如謂を國の面白や
拙とありまのつれ相生の松乃
物語を前より置きしをなにか
昔の昔人の下り見定めくたふ世
のありあり上き夜とらさ上代乃

万葉集のいふ入乃時 佳吉と申さ

今此代は佳吉の世をたの事
松とまゐぬよの葉乃 榮への古
おむあ上代をあらはしたる也
月しくまひのる程や今くそ不審
昔の月乃 光りやうる西の海乃
かたの位乃 實のさ夜 松色

高砂
ふりや松うえのさきの葉の露の
玉心をかろく粒とありて
いまさきのしよよ敷しまのけ
ぶらうのやウチの長融の
が精非精の目色しみそ
下あまの風聲水邊
物のこもる心あり
高砂

高砂
うきき枝の虫乃地霧よあくも
皆和奇乃法あり
萬木よ胸きそ十八
高砂の縁をたてて古今の色を
皇乃帝爵あり
とて吳國も本朝も
賞琥と
高砂の尾より
高砂

高砂

七

冬ニの一ありノ暁ハきク霜ハ多ク木ノきトも
松ノ枝ノ世ハ多ク同ク深キり立り立り立り
陰ノ月ハ夕ニ發シけル落シ世ノ重キぬ
冬ノ誠ハありク松ノ木ノ散リ勢トして
色ハ多ク正ニ木ノりつつあるニ世ノ重キぬ
ゆキらとまハ木ノ甲ハも名ハ多ク砂
若キ木代乃ためも相宜乃松也
ヤラ木代乃ためも相宜乃松也

てたらいウ上木地 宜クあらむニまる松枝のりく
若キ木乃音物りりき。其らも名ハ多ク葉
多クや今多ク行をらつて入はは是也
多ク妙住乃江の相宜乃松ノ精ハ多ク婦ト
現ル多クりりりかきも相宜乃名前
乃松の亭物を顯りて葉木らるる
あまれたも賢木代らるりあも

馬抄

びをさびる手よの壽福をいつま
 ぶ林果の民をたゞ萬歳樂よの命
 をの相生の松月歌乃聲そ夫
 ねしやきく

田村

第 鄙 志 却 路 隔 て 暮 々 々 九 室

乃 喜 よ 急 う せ 是 当 東 國 方

より出たる僧ありし。我未都を

又の作程ふ此書思ひ立て作
 ちあろそちんや海生あうもの春ふ
 宅ウくがきも長岡よめくる日

成清寺トの音羽山トの御音トも
成清寺トの音羽山トの御音トも
成清寺トの音羽山トの御音トも

都清水寺トともやトまきトん

是成梅の威とみくトてんトを依て妻

寺トの思トのト松トのトまト乃ト手

向と成トまトまト地主ト権ト現トの花トはトりトを

出ト入ト花トの名ト前ト松トはトまトとトりト其ト大ト悲ト

のトきトるト色トしトるト故トのト洗ト寺ト乃ト地ト主トの

櫻トよト志トくトまトあトらトまトはトあトやト大ト慈ト大

悲ト乃トまトのト花ト十ト聖ト丹ト里トのトりトをト三

十ト三ト乃トあト三ト月ト五ト河トのト水トよト歌

清ト乃ト早ト振ト非トのト中ト庭ト乃トゆトふ

あトわトやト白ト多トへト花ト雲トもト霞トもトうトつ

まトれトくト付トまト梅ト乃ト梢トをト見ト渡

昔大和國小鳴寺と云可よまきんを
 やつとむ沙門ぶ才乃觀世音とて
 まんと抄ひひよ有財こつ行乃りよ
 よりのまみぬりきりさしと寺登の
 てとれ一人の老翁ありは翁語
 といつく我き是行教居士といへり
 母一人乃檀那をもちり大伽藍を建

まよへりて東をゆりてとひまぬ
 ざれ行教居士といつても是孰多蔭
 壇乃再証中ま檀那下成まてと有
 是坂乃上の田村丸上今其
 乃流きたる清水乃上深さ稽
 手中の下が上手下りく上稽
 乃ちつひ普く中國下云萬民上を下り上り

一、大、悲、乃、歎、う、方、秘、ま、び、ん、や、安、未
世、方、より、い、ど、此、世、は、ま、示、現、し、て、我、ら
為、の、觀、世、音、あ、つ、く、も、愚、成、へ、り、や、く
を、此、面、白、ま、い、人、よ、し、ま、り、あ、ひ、く、の、あ、つ、か
び、み、く、渡、り、た、ら、う、皆、う、ら、あ、つ、て、そ、の、説
法、教、え、し、ら、ま、る、皆、名、の、あ、つ、て、人、の、壽、多、く
あ、つ、く、一、
先、南、よ、あ、つ、て、塔、婆、乃

み、く、て、の、ら、び、や、成、可、ま、く、う、
こ、そ、ま、り、れ、中、山、清、因、寺、今、然、如、法、
み、ま、り、く、
い、ま、る、の、ま、び、う、あ、れ、即、寺、ま、り、作、ら
候、人、音、羽、乃、山、の、影、より、も、出、る、る、月
の、あ、つ、ま、り、し、地、ま、の、様、よ、う、つ、る、氣、色

田村堂の行きも月のむくを押し
まてうらよ入を給まり内陣入を
給ひまり 早上 おもも散や榊入陰
子舟がく花をたふある法乃場
味もぬ月のおとたよ此は經を讀誦
下 なま 上 あら有難乃所經やお
清水寺の御津浪まると一行の流を

ゆく他生の縁有核人よを察せり
衣色乃漬箱是そ則大慈大悲乃
観音擁護乃結縁たる 上 中 下 かしきや
お花のきりまのやまき男神の人
乃らるる行よきめり成人をましぬをそ
今行きまつまへま仁王五十一代卒城
天皇乃所守よ有坂の上乃田村丸

日 東夷をたらしむを悪魔と志のめ天下
 泰平の忠勲たりしを初當寺の仏力也
 悉く君の宣旨よの務めしむるの
 あくまを志のめ初鄩安入を志す
 又の信より軍兵を調へ既く
 時節よまはりて此観音の仏前よまはり
 祈念をいしむ立教きしむ かの
 日 瑞言ありたあれ 歡喜傲笑の頼を
 少むむく意き凶徒よ打奪り 普天
 乃下率去の平居く玉地ありさるや
 頃てありし竹關の戸ありてありさるや
 山をこゆまはるる乃の繁津乃の森や
 かのろの名山寺を少むる目も
 清水の一佛と頼をありしは路登

瑞言ありたあれ 歡喜傲笑の頼を
 少むむく意き凶徒よ打奪り 普天
 乃下率去の平居く玉地ありさるや
 頃てありし竹關の戸ありてありさるや
 山をこゆまはるる乃の繁津乃の森や
 かのろの名山寺を少むる目も
 清水の一佛と頼をありしは路登

芳田の長橋（上）の約（下）を乞（下）なりや
 いま（上）の既（上）に伊勢路乃山（上）ち（下）く
 弓馬乃道も先（上）りきし（下）と（下）う（下）つ（下）色（下）し（下）み（下）き（下）
 あり梅（上）り（下）え（下）の（下）花（下）も（下）お（下）望（下）も（下）色（下）し（下）め（下）さ（下）て（下）
 だ（上）き（下）死（下）心（下）を（下）あ（下）ら（下）う（下）ね（下）の（下）去（下）も（下）ま（下）え（下）我（下）大（下）
 我乃神國（上）よ（下）き（下）と（下）より（下）観（下）音（下）の（下）出（下）極（下）音（下）
 仏力（上）と（下）ら（下）ひ（下）神（下）力（下）を（下）あ（下）ら（下）ね（下）く（下）よ（下）ま（下）ひ（下）く（下）

せう（上）まつ（下）と（下）ら（下）き（下）う（下）て（下）さ（下）を（下）あ（下）ら（下）う（下）乃（下）大（下）珍（下）鹿（下）
 乃（上）み（下）う（下）こ（下）き（下）一（下）世（下）も（下）ま（下）て（下）も（下）男（下）の（下）佳（下）例（下）
 あ（上）ら（下）一（下）去（下）程（下）よ（下）山（下）行（下）を（下）勤（下）く（下）の（下）鬼（下）
 神乃志（上）ま（下）よ（下）ひ（下）ま（下）地（下）よ（下）満（下）て（下）萬（下）亦（下）を（下）
 い（上）ち（下）の（下）勤（下）攘（下）き（下）り（下）い（下）ら（下）よ（下）鬼（下）神（下）も（下）慥（下）よ（下）
 ま（上）き（下）昔（下）も（下）去（下）た（下）め（下）一（下）あ（下）ら（下）ざ（下）ら（下）し（下）ら（下）ひ（下）
 一（上）年（下）片（下）よ（下）は（下）く（下）一（下）鬼（下）も（下）王（下）位（下）を（下）背（下）り（下）と（下）

天四討^セもて^セち^セを^セ控^セれ^セの^セ息^セ亡^セひ^セる^セき

そ^セう^セま^セも^セや^セま^セら^セか^セら^セぬ^セ廣^セ山^セ

振^セ放^セま^セれ^セの^セ行^セ方^セ乃^セ海^セく^セあ^セれ^セく^セ松^セ原^セ

村^セ立^セ勢^セ乃^セく^セ鬼^セ神^セの^セ雲^セ鉄^セ火^セを^セ

少^セし^セつ^セつ^セ教^セ子^セ諺^セよ^セ身^セを^セ言^セふ^セて^セ山^セ

乃^セく^セく^セま^セし^セき^セる^セ殿^セよ^セ判^セれ^セを^セ

み^セよ^セう^セま^セも^セや^セあ^セく^セ味^セ方^セ乃^セ軍^セ兵^セの^セ

旗^セ乃^セと^セよ^セ千^セ手^セ觀^セ音^セ乃^セ光^セを^セ教^セつ^セく

虚^セ空^セよ^セ身^セ行^セ刻^セ千^セれ^セ由^セ手^セ毎^セよ^セ大^セ悲^セ

乃^セり^セよ^セ智^セ惠^セ乃^セ矢^セを^セも^セあ^セて^セ一^セ度^セた^セ

あ^セを^セの^セ千^セの^セや^セら^セに^セ兩^セあ^セれ^セと^セり^セの^セ

つ^セて^セ鬼^セ神^セれ^セら^セよ^セ乱^セま^セ落^セれ^セた^セ

く^セを^セ矢^セ先^セよ^セか^セつ^セて^セ鬼^セ神^セの^セ跡^セ

も^セ討^セま^セよ^セち^セの^セ有^セ難^セり^セく^セや^セ誠^セす

呪咀諸毒藥會は觀音乃ち
物をもてまかりて置著於人
遇美於人乃敵を亡びたり
身觀音慈悲力あり

田林

十一

口

第一
月をば
あつた
一見れ僧
天王寺
立て五寺
都をた
まはる
夜深
はる
核
た
て
る

渡れり舟行来りごとく芦花ほ
乃らえりハ松乃煙の浪よもるは口
若宮よきりハ相多是
あつは江口乃君の舊跡や痛り
や具乃の去平よ押せとらんを各
とまりて今迄も昔のり乃旧
跡をづらみらるの氣はよきもや

西行法師此可ましく。おの宿をうり
きよあつは松乃煙の浪よもるは口
をいよまらるるもあつは口乃や
とりを惜まそ君のいと諫きんも此
可まその事あるをハあつは口乃や
登依ニテあつは口乃や
乃寺をい行と思ひよりてなまらる

甲信

さし給るる甲信 ちもあ人家を
 かえぬ方よりも 女性一人集りつ
 じろ詠みあそびくも ままこしむらあそ
 どりも給るるも 行故よ事おぼさ
 三上年を病し物よ又思ひ言
 の葉乃上ぢよのまきぬく露乃世をい
 とあはしそあつめありの宿りま

惜しむのばあみの葉もまらまきれ
 のこの惜みしあう物あらしま其理
 ももしき為よこれ送願まあつる
 ち甲信あもまらりれ宿りま惜ま
 君かあし西行法師詠き一跡を
 唯行とあへるあ前よばりのまを
 まあふとと理給るあ力かん信いが

あゝ人あて梅まき人女の三あは

きけしそ惜まぬよー乃はみぢを

申しまをる行つてくう誅しを勢

させぬららるる甲文具を予乃

その世の母下人さきま

かりれ宿よ女とひあと思ひうらそ

と母あし捨人さるあ中まは女の

宿りよあしあせぬも抑あつてもや

うまことりりあし西行を假れ宿りを

捨人とらひ女此方にあよあひ色にれ

己の家よさし色抑あつ人志れぬ

巾の多き宿よ甲ころとむあ

泳し給ふき女捨人を思ふ心あるを

唯惜むとれ女言の葉き上を

流を情まぬ假乃宿あさるをうくおと
や惜むとらふ浪のきうおらぬいふは
今うても。控人乃世語よ。あ
めはひらう。吉手地。実やうき世乃物語
ぎまは安もたそうれよ。かまきう。人
きう。女上。かきう。かきう。たきむ
歌きほつくとみえうく。礼あるに

く。女。口乃流き。の君と。わんえん
ちう。女。相き。疑ひ。何。く。儀。れ。取。と
清。み。節。あ。き。や。女。か。り。よ。住。あ。我
宿。乃。地。梅。の。た。ら。え。や。見。し。け。き
思。乃。女。君。か。き。ま。き。ら。也。樹。の
陰。も。宿。し。ま。き。ん。又。ハ。一。行。の。流。き。れ
水。ほ。も。き。ら。め。き。れ。よ。也。江。口。の

あさに行の流きぬ女とあるは
世の靴の思ひも多し悲しき
紅花の花まら行の紅錦繡の山粧を
あひみえしも夕の霞ありけ
紫の秋乃夕黄顔顔れ杖の
とくは月の霜よりの夕の月
よ詞をかりん賓客もさつと
あ

あま翠帳紅国よ柳とあへ
そいつ乃まよかつるは松よ
さ事本情あま人輪の花まを
多しまわくきたひさし
時の色さうま負ま乃思の清
あつ時色を愛執の心
心よ思の口よりま言れ縁と
あ

其落とありてし、
つゞきりてし、
葉とく西の空に
松はゆるありてし、

斑女

^ねか様子作者の義濃國野上忠実
長あゝ、
持まろりてし、
こよりり吉田の少将殿とや
れ東へはりりてし、
くは花子と傳へし、

わさし國へりし夢の比東よとりぞや
 秋もも吹くは夕うまもこまらり作
 都をたへるこたよまむとくづく志
 りにふる秋の音白河乃南路
 より又まらるる接衣浦山るそま
 國路とららとよまきりきりく
 早河
 めるすま報りある急向是くうやみれ

國野上乃宿まきく此河よ花子と
 えし女ももさるる事ある来此河よ
 あらり尋て報り人 ^{トモ} きては花子ぬ愛
 と尋やてくは長と不和ゆすのゆひ
 てどの此河よは入あさより作
 早河
 梅の定あむしりあうらるる花子ぬ
 早河
 早河

中上をくるとかして付く。志同程
 かく都は志てん我宿願乃子細
 あまの景より直よたるとしあう
 もるあまの景よりあう
はなせいで
 乃雲岡をわきては生おくる草乃え
白
 けうよみえう君のまじりあう人よあ
世
 き衣の目と重ね月のゆきをた世をた

肉の便あうていぶりを志くはる人
 もあうグア言乃その旗手よおを
有
 ちるうのあをよあうわおくまをい
 たつらあひるを種や色し構
ヤル
 ち思つらうをう給へ支あう
 箱根玉津嶋貴布祢や三輪乃明
 神は支ぬ男女のかさしを身とんと

上よの秋の風うらさ 下男 夏うらさ扇
 と秋の白露とけきり先よ起所乃
 藤花も獨子のびりき枕して
 困れ月をあうめん タリ此 月重山かこれ
 めきした扇をあきてこれとあうめん
 花中よよ敷ぬれきもきとあうめん
 春もさしめ 下 夕の風あうさるを

けきか思ひの妻あうぬりき
 の鐘の音きいろ乃山よ御音つ明
 あうさあきと候し 下女 せめて園
 偏月ふも志り枕子幼りて又
 獨れよ成ぬるや クセ 翠帳紅園子
 枕あうさる床の上あうぬりて又
 すかすも同穴悲涼夏もあうさる

古表
うたあひまも忘れぬ人言の盛を
いそそのそりれ下つしおしよあひま
うそそをみくううまあはあま
上女
かそへは押行乃ためうと夕暮の月
をさきよの繪の繪の物りり
き行の所ためさるん
よや白露乃草の形と乃控ぬ

きしちきりかゑあひめあひま
下女
錦ととく東路の末乃松山浪
うそそをみくううまあはあま
上女
の松山う波の行う娘えん契うた
形乃の扇うあひま
持しこのあひま
上女
とりむをさるん
ヤラ

ほのくれの文敷の花を去たる扇あり
此上六作克子志そくめりてあつふ
扇が流きよまようれえと去られ
白雪乃扇の葉のかまむしもさ
あう乃情たきく

鶉飼

是の安房をさよもみよりおうれ

僧之の我未甲斐國とカ人の行末
洗度甲斐玉行跡と志ての行末
いつと去る浪の安房乃清江立あぐ
六浦のわたり鍾入山 屋まりて
めら様法くもつる身あれし

たきおきてはるがうき救生のついでに
あくが義法とてはとまりあつてよ
れいさあくが命をほつていへ
先きして久た若年より洗つて身
命を授けりゆに今更とあつて
もあくが^レあつていへ
あつたるゆに洗つて先よび行下

岩落と申すは浦りゆに様のごう
ひよと海に獲よ科乃中の救生の由を
してはるがもとも思ひきん我屋よ
てゆに^レあつていへ
あつていへ^レあつていへ
あつていへ^レあつていへ
あつていへ^レあつていへ
あつていへ^レあつていへ

オカ

ワキ

オカ

ちりあし 志願つひの打ちつあし 鶏
 此の浪まらうと投き 面白
 あり様や底もまじり 舞火よ打
 うく魚を張まう つかつとすすこひあ
 ぎ障の魚をうす 耐きつたも 靴も
 なる世も忘れさく ねら白や 漲る
 水のよとあふい まきの 蟹のほえ玉

鳴子あし ねら白や 蟹のほえ玉
 木よびみく魚のよも ためが ぎや
 あし 火のともすも 暗くあ
 魚のしり月ありあ 舞火よ打
 鶏舟のわらうを 濱で 割路よぬら 此
 身のなま ちをが せん
 け 瀬の石をむらひあ けく 好成

軍上

梅
右之
僧
松
果
社
他
也

右之本者觀世太夫章平句
真本令版行畢

正徳六丙申歲添生

示来荏苒數十年ノ星霜ヲ経ルニ從ヒ
改正増補ヲ加ヘシモ印刷ニ附セサレハ之ヲ
世ニ公ニスル能ハサルヲ悲ミ今般
宮内者 御用達觀世清孝ノ校合ヲ
以テ茲ニ之ヲ上梓スト云

明治十一年十月十七日出版御届
同十二年三月發兌

京都府平民

出版人 檜

常

上京第三十區二條通寺町西

丁子屋町三十五番地

